

# ヴァトナ嬢の『感情教育』

金山富美

## I. はじめに

『ボヴァリー夫人』『サランボー』の発表によってすでに小説家としての地位を確立していた1863年、フロベールは二つの本を構想する。ひとつは「分析を並べるだけのものであり、偉大さも美もなく、凡庸なゴシップを連ねたもの」、もう一方は「国民のあらゆる階層から石を投げられ、政府からは追放の憂き目にあいそうな<sup>1)</sup>もの、と作家自身が形容している。のちに『ブヴァールとペキュシェ』となる前者草稿を机中に納め、フロベールは翌年1864年に後者の執筆に着手するが、それは20代の頃二ケ年にわたって試作した『感情教育』の決定版であり、まったく新しい着想を盛り込んだ小説として結実する。つまり、初稿のもつ「情熱の書」としての性格に、「二匹のわらじ虫<sup>2)</sup>」の性格をいくらか加え、さらにそれを同時代の大きな歴史の流れのなかに配置していったのである。

フロベールは、自らの分身といえる若者を、自らそのなかで生きてきた七月王政下から二月革命、六月事変、そしてナポレオン三世の第二帝政へと至る時代を歩ませる。青年フレデリックの周囲には、今や壮齢のフロベールが過去から「現在」にいたるまでに眼にしてきた、あるいは実際に出会い、接触してきた人々が小説家の言葉を通して昇華され、さまざまな登場人物として踊ることだろう。そのなかに、我々は一人の老嬢、ヴァトナを見い出す。

フロベールはヴァトナ嬢の創造に、彼の文通相手の一人であり10年間にもわたって交友のあったアメリ・ボスケを「できうるだけのところで役立て<sup>3)</sup>」たと述べている。作家と同じルーアン出身で、ほぼ同年齢であったボスケ嬢<sup>4)</sup>はモデルにされたと憤慨して、『感情教育』刊行後まもなく『女性の声』紙<sup>5)</sup>に本作品を非難する文章を投稿する。以降、二人は交渉を断つこととなる。

「役立てて創造する」と「モデル」の二つがまったく別の問題であることはいうまでもなく、フロベールは「一、高い精神性によって、趣味によって、芸術への敬意によって、また二、モラルリテによって、礼節の感情によって、ま

た正義によって、そんなこと（＝自らの姿勢がボスケの怒りを誘発すること）夢にも考えてはいなかった<sup>6)</sup>と、芸術家としての姿勢において自己弁護している。ボスケ嬢をヴァトナの創造に「役立てる」にあたり、フロベールがこの女性に、わが身同様にペンをとる者としての理解と寛容を期待していたことは十分に推察できる。フロベールは事実、『感情教育』執筆中にボスケにさまざまな質問をし、社会で「老嬢 *vieille fille*」と呼ばれている女性のあるタイプ、またその思想に関して情報を得ていたのだ。だが一方、すでに『ボヴァリー夫人』で読者がモデル探しを好むのを承知しているなか、そうした行動とその結果としての作品がボスケ嬢との関係を危うくする可能性があることに、作家がまったく無頓着であったわけでもあるまい。では、それをおしても、ヴァトナが作品のなかにはめ込まれなければならなかった理由とは、一体何だったのだろうか。そんな素朴な疑問がわいてくる。

『感情教育』におけるヴァトナの役割について、かつて言及されたことはほとんどない。アルヌー夫人、ロザネット、ダンブルーズ夫人、ルイーズ・ロックのように主人公フレデリックの恋愛対象にならないとはいえ、彼女らと並んで作品中に頻繁に登場するヴァトナ嬢を、当時の状況をリアリティーをもって描き出すための大勢の人間の一人、ただ道具立てのひとつであるかのように触れぬままでは、作品理解のためにいささか片手落ちではなからうか。本小論では、フロベールが尊ぶ芸術家の「聖なる位置」<sup>7)</sup>という点も踏まえながら、作家がこの老嬢にいかなる役割を付与し、作品に作用させているのかを考察していきたい。

## Ⅱ. 作品の「ピラミッド」におけるヴァトナ嬢の位置

フロベールは『感情教育』執筆後まもなく「<材料>が足りない。[中略]これではピラミッド型にはできない<sup>8)</sup>と呻いている。作品の「ピラミッド」完成にあたっては、さまざまな場面 *tableau* が実にさまざまなタイプの人物で彩られるだろう。そこでヴァトナ嬢の占める位置についてまず考えたい。

ミシェル・マルティネは『感情教育』を「登場人物たちのカドリーユ *Quadrille*」と形容している。作品にはたえず「4」という数（2組のカップル、あるいは4人ひと組のグループ）が象徴的に登場し、その2（または4）項が対比また対応されるなかで、一世代の人間模様、時代、社会が豊かに描き出されているというのである<sup>9)</sup>。それを以下簡単にまとめてみた。

- A. 全体をながれるもの
  - a. 象徴的な2組のカップル：フレデリックとアルヌー夫人との恋愛の軸/フレデリックとデロリエの政治（社会的成功に関わる駆引き）の軸
  - b. 社会（政治）的価値観に関する2動向：右派と左派、あるいは保守派と改革派（ダンブルーズ氏、ロック氏、シジー、マルティノン VS デュサルディエ、フレデリック、デロリエ、セネカル）/以上各派固有の観念とその変容（あるいは混濁）
- B. （社会、政治的側面での）自由への夢とそれを希求する道程：フレデリック、デュサルディエ、デロリエ、セネカルの4人の若者
- C. 恋愛への夢（主人公フレデリックの恋愛対象となる4人の女性）：アルヌー夫人、ロザネット、ダンブルーズ夫人、ルイーズ・ロック

「カドリーユ」というマルティネの指摘は卓見だが、そこにはヴァトナ嬢の存在だけがすっかり抜け落ちている。この人物についての言及はまったくされず、彼女一人、踊りの輪から取り残されているかのようでもある。しかし、ヴァトナの登場場面を凝視すれば、我々は、この人物が踊りの輪から切り離されているどころか、上述の副次的登場人物たち以上に舞っていることを看取できるだろう。ただし、上記A-B-Cいずれにも多かれ少なかれ顔を出しながら、ヴァトナは気づかぬうちに消えている。なによりまず、そのことに注目する必要がある。ひとつのカドリーユの輪から次のカドリーユへと次々と移動するヴァトナ嬢の役割は、次の描写に暗示されていると考えられる。

フレデリックはある日、画家ベルラン宅で「紙挟みのなかをめくっていて、ジブシー女の肖像画に眼をとめたが、そこにはどこかヴァトナ嬢らしい面影があった<sup>10)</sup>。また、ある日のヴァトナは「薄い黒琥珀の衣裳の上に、時計の装飾金具」を身につけて姿を現す。金具が彼女の「荒っぽい動作に、いっせいに音をたてた<sup>11)</sup>。

『感情教育』に登場する女性たちはそれぞれ固有の風情を与えられており、その有閑的またはその生業を推察させる服装や仕種は、場面を追うなかで、さまざまなエピソードのなかに挟み込むように、段階的に描かれていく<sup>12)</sup>。上記「ジブシー女の肖像画」、ジブシーを思わせる「黒い衣裳」と激しい動作に「音

をたてる時計の装飾金具」は、ヴァトナ登場の諸場面のなかでももっとも最初に示されており、そのことから、この女性には、移動生活を行い、組織にかかわらず労働を提供するジブシー的な役割が付与されているとの仮説が可能だ。

加えて、フロバールの登場人物に対する名づけに「響きの重視」が指摘される<sup>13)</sup>ことから、この老嬢の名前もなんらかの意味を内包し、そこに作家がこの人物に与えた役割を見ることができよう。というのも、ヴァトナ Vatnaz [vatna] は Va-t'en [va-tā] (=立ち去れ) を想起させはしないだろうか。ヴァトナは「立ち去る女」<sup>14)</sup>なのである。彼女にはマリー・アルヌー夫人やロザネット・ブロンなどのように名は付与されない。そして姓はしばしば人物の「出自」を表すのである。ヴァトナの「さまざまな場に現れては去り、去ってはまた現れる」ジブシー的特性は、その呼び名によってさらに印象深いものとなろう。このことは、作家フロバールがエクリチュールに「口 gueule」を通すことを習慣づけており、その行為を通し「感覚として得たもの」とその「感覚が醸す意味合い」とを重視していた事実を知るならば、決して無理な解釈ではない。

さて、あらためてマルティネ指摘のカドリーユに話を戻せば、ヴァトナの存在は『感情教育』の政治的側面と恋愛の問題双方にからんでいる。また作品には彼女の恋愛も描かれる。ヴァトナ嬢のジブシー的役割がこれらの点でどのような効果を与えているのかについて、より踏みこんで眺めていこう。

### Ⅲ. 社会・政治的カドリーユのなかで

ヴァトナは「老嬢 vieille fille」、いわゆるオールド・ミスである。このテーマは19世紀の小説、『ウジェニー・グランデ』『いとこベット』『老嬢』など、ことにバルザックの「風俗研究」によって知られてきたが、ほとんどの場合「ひとえに、愛し、生み、そだてるために、寛容かつ献身的でなければならない筈の女性の<天命>が[中略]欠如して」、そうした悲苦の状況のなか「自分の孤立のことで自分自身を責めたてる前から、ずっと長いあいだ世間にその責めを負わせて来ている」独身女<sup>15)</sup>として描かれる。ヴァトナ嬢に関しては、これらバルザックの描く老嬢たちといく分魂を共有しながらも、時代の変化に対応した性格を備えている。

ヴァトナはかつて地方の女教員をしていた。それは七月王政期の教育改革を背景とし、男子初等教育を本格的に整備したギゾー法から三年後の1836年、

プレ法によって、市町村の随意ではあるものの女子小学校開設が法令化された事実<sup>16)</sup>に基づいている。

一方、『感情教育』全般の歴史的背景には産業革命の発展がある。このいわゆる「人類の進歩」と並行し蔓延していった社会問題は、七月王政下の政治制度の手直しだけでは解決しえないものだった。1830年から40年代にかけてのフランスは、経済活動の個人主義や自由競争のなかで搾取され、かつ見捨てられた社会的弱者である労働者や貧民を失業や貧困、そして無知から救済するために、多種多様な社会主義的改革プランが提起された時期である<sup>17)</sup>。社会主義を標榜するものなかにはサン＝シモニアンやフーリエリストらがあり、その女性に好意的な思想（彼らはブルジョワ社会と教会がともに奨励する貞淑な妻と模範的母亲という役割、いわば女性への一方的強制ともいえる「幸福」とは非なるものを提案した）は、男女の平等を掲げた多くのフェミニスト女性の共感を得た。しかしながら、これらの社会主義思想はマルクスに観念的非現実的な空想社会主義と批判され、さらにフランス国内では社会主義の「正統派」から一斉に弾劾され、なきものとされることだろう。同時に正統派は、社会全般と足並を揃えて、具体的かつ現実的に女性の社会的諸条件を問題にしようとするフェミニスト女性の要求とは内実ほとんど真逆の「女性崇拜 féminocrate」を唱えながら、これら女性運動家たちを滑稽視するようになる<sup>18)</sup>。

『感情教育』中に特に描かれているわけではないが、ヴァトナは地方の小市民の娘として生まれ、当時にあっては十分な教育を受けた女性だと推定できる。おそらく当時の社会情勢が、そしてまた彼女を「女の幸せ」から遠ざけるその「不器量さ」<sup>19)</sup>が、ヴァトナの胸に社会主義思想を抱かせたのにちがいない。彼女は彼女なりの大志に突き動かされて、少なくとも当時の女性にとっては「しかるべき」職業であった教職を捨ててバリに上ったのであろう。「家庭教師をしたり」小新聞などに「デッサンやろくでもない原稿を売り込んで」<sup>20)</sup>生計をたてる「がっしりとした足」<sup>21)</sup>をしたこの「バリの独身女」は、「低い折れ襟の黒っぽい衣裳をつましく着て」<sup>22)</sup>、彼女の社会主義を熱烈に宣伝する。それはつまり、婦人の解放あつてのプロレタリアの解放である。あらゆる職業の門戸を開くこと、より合理的な婚姻法の制定、乳母や産婆の官吏への登用、婦人専門の出版社、婦人のための理工科学校、婦人のための国民軍、婦人のためのあらゆるもの！…<sup>23)</sup>。フロバールは「ヴァトナ嬢の社会主義思想については（テキストをもって証明できるものですが）、誓って何の誇張もないことを

申し上げる。すべて、48年に印刷されているものです<sup>24)</sup>と語っている。

サン＝シモン主義が現代人の我々にとって必ずしも空想主義的でないのと同様に、今では十分にうなづける内容をもつヴァトナ嬢の社会主義思想が、作品のなかでいささか滑稽に描かれているということは否定できない<sup>25)</sup>。とはいえ、他の登場人物が口にする「思想」と比べ、「文学と倫理を扱った教育的文集『少女たちの花環』<sup>26)</sup>発表を望むこの「閨秀作家」<sup>27)</sup>がとりたてて愚かしい印象を与えるか、といえ、決してそのようなことはない。

前述マルティネの提起(A-b及びB)に挙げた登場人物を眺めてみればよい。保守主義者の面々、行動より夢想を好むフレデリック、そして「もう一人のフレデリック(対照的人物)」で「時代遅れのラスティニャック」<sup>28)</sup>といえる日和見主義・利己主義・出世主義のデロリエは、ヴァトナの社会主義思想と比較の対象になりえぬ「思想」レベルにとどまっている。

ヴァトナと比較できそうなのはセネカルである。ところが、彼は主人公フレデリックに一度もよい印象を与えない。「短い角刈りの髪に高くそった額」「灰色の眼になにがしか冷酷なものが光る」この「共和主義者」「未来のサン＝ジェスト」<sup>29)</sup>には「長いフロックという身なり全体に教育家か僧侶のようなものが感じられ」<sup>30)</sup>る。彼の口からは、芸術は「大衆の教養を目的とすべきで[中略]道徳的な行為に人を導く主題のみ表現が許される」<sup>31)</sup>との主張がもれる。また、ペルランに「民衆の惨めな生活を描いてごらん下さい」と勧めながら、「フランス大革命の先駆者としてモリエールに敬意を払っています」<sup>32)</sup>という、狭量なうえに矛盾だらけの見解を躊躇なく表明する男なのである。セネカルは「切れる頭の持ち主だが、理論体系にしか眼をくれない」<sup>33)</sup>のであった。

その他、セネカルと同じく「愛国者」(ただし「双方はちがう」と小説中に明記)のルジャンバルは「ただ事実のなかに、ただの事実しか見ず」、「卓見など一向にもっていない」<sup>34)</sup>。「文学青年」ユソネの念頭にあるのは「劇作での名声と金もうけ」<sup>35)</sup>に限られ、町娘を相手に「僕を子爵様と呼びたまえ」と駄弁を弄するばかり<sup>36)</sup>で、しまいにはヴァトナに「馬鹿ね、あんたは！」とため息まじりにたしなめられる<sup>37)</sup>のが関の山である。また、シャトー・ドー哨兵所襲撃、テュイルリー宮焼討ち、王制崩壊の後、周囲からおだてられた主人公が柄にもなく国民議会選挙の候補者に名乗り出ようとした時のこと、政治クラブというクラブは「赤いの青いの、乱暴なの静かなの、真面目なの放埒なの、わけのわからないの酔っぱらいみたいなの、国王の死刑を要求するのや食料雑貨商

の詐欺行為を非難するの、etc.」というあり様で、フレデリックは「弁士たちの低調を目の当たりにして」、「あまりにも無教養な、あるいはまた極度に激しい敵意の連中」と感じずにはいられない<sup>38)</sup>。さらに、素朴で理想主義的な若者デュサルディエが探してくれた「少しは希望がもてそうな名称」の「知性クラブ」に赴けば、そこにはなんと、風采を「ブランキに似ようと努める」セネカルが議長席を占めている。なお「ブランキ自身もロバスピエールを手本にしていた」のだから、セネカルは偽者の偽者に他ならない。このクラブで、フレデリックはフランス語を話せないスペイン人候補者の演説を「誰にもわかりはしない！」と正当に指摘したせいで、退場させられてしまう<sup>39)</sup>。

なお、フレデリックは社会的・政治的意識をもたない青年であり、だからこそ、こうした場面で作家フロベールは、この若者のいかなる偏見にも侵されない無垢の視線をいさわたらせていると考えてよい。上記青年の思いは、通常「神の視線」を心がけている作家の意見表明であるともいえよう。

フロベールはヴィクトル・ユゴーの描く登場人物に対して「さまざまなタイプの人間を十把ひとからげで操っている！どの人物もまったく同じような話し方」の「砂糖菓子の人形」<sup>40)</sup>と非難している。そして、そのフロベール自身は登場人物一人一人の口から個々特徴的な教条主義を乾いた文体で語らせながら(それゆえ、彼らの自家撞着は読者に容易に伝わることとなる)、同時に、そうした価値観で測られる世界では「失格者の種族」<sup>41)</sup>に他ならぬフレデリックの眼差しのフィルターを通して彼らの風貌、あり様(つまり語によって構成される「人物」)を読者に漸次印象づけていくのだ。『感情教育』の登場人物はバルザックが創造する人物とは明らかに異なっていながら<sup>42)</sup>、ポリフォニーにおいては『人間喜劇』と通じている。ただし、その多声は玉虫色の能弁であり、いずれもがカドリーユの踊りの輪のうちに、まるで埃が舞い散るように消えてしまうだろう。七月革命以来の国家は銀行によって支配され「ブルジョワジーがフォーブル・サン＝ジェルマン(＝ブルボン貴族街)にとってかわったわけで、銀行はブルジョワ階級の貴族なのです」<sup>43)</sup>とスタンダールは述べた。『感情教育』には個人であれ集団であれ、もはや「勝利する人間」は不在なのだ。フロベールにとって、1848年とそれを巡る出来事は「希望をもたらず革命」の弔鐘であり、そこに生き続ける者は、労働者からブルジョワ階級に属す人間まで皆「ブルジョワ的社会」で真に自由な権利を得ることなどありえない。自由(の錯覚)をもとうとすれば、マルチノンのように魂の面でブルジョワ的なる

ものに迎合し、それを自らのものとして活用する他方法はないのである<sup>44)</sup>。

やや冗長を連ねたが、以上のように空疎に響く「改革派」「社会主義者」の思想の狭間であって、ヴァトナの説は異なった温度差で描かれる。一見五十歩百歩のように見えるが、フロベールはそこに他にはない潤いを与えているのだ。なぜなら、いっばしの社会主義思想を熱心に唱えるこの女性は、少なくとも独断主義に陥ってはならず、それなりに人間を見ているからである。労働者の幸せを口にしながら、職工を「理論一点張り」で「厳格にとりしめる」「舎監のような」セネカルに対して、フレデリックは「君は人間愛を忘れてるよ」といわなかつたらうか<sup>45)</sup>。一方ヴァトナは、長く入れあげ、世話をしてきたデルマールとロザネットの双方から裏切られながら、一時の憤怒の後、再びデルマールを「人道主義の魂」と呼んでその興業に尽力し、またロザネットの使い走りをするという、きわめてお人好しな行動をとっている。そんな老嬢を目にしてフレデリックは「なんて風変わりな女 *singulière personne* なのだろう」と首をかしげる<sup>46)</sup>。この「風変わりさ」は、周囲のブルジョワ的人物たちと対照的で、「特異な」という意味を肯定的に含んでいるのではないか。

フロベールは後に「青鞥派 *bas-bleu*<sup>47)</sup>についてはその籠の花にいたるまで知っていますが、ヴァトナ嬢とはなんら類似点はありません」<sup>48)</sup>と本音をもらす。これについては、「思えば一人の詩人だけが、女というこの可愛い動物を理解できたのです。それは師のなかの師、全知のシェイクスピアです。[中略]シェイクスピアは女を [中略] 決して道理を供えた人間にはしなかつた」「女にとっては氣質がすべてです」<sup>49)</sup>の言に見られる女性観の両義性を指摘する必要もあるだろう。「彼 (=シェイクスピア) の描いた女の顔は、理想にかなってもしれば真実でもある」との意見、あるいはまたフロベールの「親愛なる師 *Chère Maître*」ジョルジュ・サンドとの交流も考慮するなら、作家の発言は必ずしも女性蔑視にはあたらず、彼が「女性の理性面の欠如」をこの性の一種の「徳」とみなしている、といえなくもないのだ。「青鞥派ではない」ヴァトナ嬢の「社会思想」にも、これと似た評価がなされているのにちがいない。

人々の幸せを約束するはずであった革命は、若々しく飛翔するどころか擦り切れ、落下する。あやまった信念は宗教的ドグマに劣らず危険であり、そこに専心する者はいかなる主義によらず「宗教裁判官」なのだ<sup>50)</sup>。こうした生気なく、くすんだブルジョワ的時代、その人間悲喜劇にいささかでも温かい血を通わせるのが、一瞬登場しては立ち去るヴァトナであり、彼女の「思想」なので

はないだろうか。ヴァトナの役割は、「正義」を掲げて政治、社会的意見をまことしやかに語るブルジョワ的登場人物たちの真の姿を顕現化する<sup>51)</sup>ことに資している。

#### IV. 恋愛・感情のカドリーユのなかで

ヴァトナ嬢は『感情教育』の標題そのままに、感情、恋愛の場面にも、たびたび「かさかさの手」<sup>52)</sup>を差し出す。ひとつは、フレデリックがアルヌー夫人以外にもっとも執着し、肉体的欲望によってもっとも長く恋愛関係を持続させたロザネット・ブロンにまつわるところである。

小説の大団円に近づくなか、ヴァトナ登場のはほぼ最後の場面で、この老嬢の秘密が次のように暴かれている。「もともとは情にもろい女で、煩悶があったためベランジェに手紙を送り相談したこともあった。[中略]ピアノ教師になったり、定食料理の店を取り仕切ったり、流行雑誌の編集に関わったり、貸間をまた貸したり、雑用女にレースを商ったり。そうした女と知り合うようになるうちに、多くの男に重宝がられるようになったのだが、アルヌーもそれを利用した一人であった」<sup>53)</sup>。つまり、ヴァトナ嬢は(Ⅱで仮定したジブシーにたとえられる)さまざまな生業の一つとして、男性に女性を「斡旋」してきたのである。ロザネットもそんな女性のうちの一人であった。

フレデリックがヴァトナの姿を最初に目にした時、彼女はフレデリックが生涯愛することになる女性の夫、ジャック・アルヌーにロザネットを紹介しているところだった。「笑うと厚ぼったい口唇の間から美しい歯をあらわにする」ヴァトナとアルヌーの間に、「まるで泣いていたかのように少し臉を赤くした」「ブロンドの若い娘」が座る。アルヌーの問いかけに「返事もしないでただじっと聞いている」「低い折れ襟の黒い衣裳」のこの娘<sup>54)</sup>は、それから約5年後(と推定される)、つましい衣裳を脱ぎ捨てて、アルヌーや金持ちのウードリ爺さんをパトロンにラヴァル通りの家の女主人となり、アルヌーに連れてこられたフレデリック青年が驚くばかりの贅沢三昧の暮しをすることだろう。そんなロザネットのもとに「頭にアルジェリア風の布をまきつけ、額をいくつもの銀貨で飾って [中略] 黒いカシミア外套のようなものを銀のラメ入りの明るい衣裳の上にはおり、手にタンバリンを携えた」ヴァトナが現れ<sup>55)</sup>、二人の女は抱擁しあう。

ヴァトナ嬢の「社会思想」はどこへ行ったのか、と疑問を呈するには当たら

ない。Ⅲで触れたようにこの老嬢に教義はない。「もともと情にもろいたちの女」<sup>56)</sup>なのである。彼女の「紅すぎて血のような色をした厚い唇」<sup>57)</sup>にも、そのことが如実に現れている。同じ理由から、ヴァトナはロザネットの憂いを晴らしてやり<sup>58)</sup>、ロザネットを男性（ウードリ爺さん）から自由にし、彼女のより大きな「自由」のために立ち回る<sup>59)</sup>。一種の正義感と個人的心情から便宜的に「青鞥的」社会思想を抱いているヴァトナにとって、ロザネットは救うべき「可哀想な娘」<sup>60)</sup>である。もちろん、それと同時にヴァトナ自身、ちゃっかりと利を得ている<sup>61)</sup>事実も忘れてはならないが。

ところで、ヴァトナが長く世話をしてきたこの愛らしい娼婦、ロザネットは自ら、フレデリックに不幸な少女時代を長々と語っている。両親はクロワ＝ルスの絹布織工であり、彼女もまた父について見習女工として働いていた。父親が瘦せおとろえていく一方、母親は酒乱で父娘の稼ぎを散財したあげく、しまいには「信心家でもあるかのような態度をした、黒い服の男」に娘を売り飛ばしてしまったのだという<sup>62)</sup>。いつかロザネットの家に「扉を押し開けて入ってきた黒い着物の老女」<sup>63)</sup>は、よその幼い少女を見つめながら「母親がなければいいんだけど」とロザネットが呟く、まさに彼女自身の母親その人ではなかったか。ドゥシャンは「ロザネットは都市のプロレタリアの出であり、デュサルディエの例を除き、[中略]フロベールの登場人物ではきわめて稀な登場人物の一人」であって、恋人フレデリックに語ってきかせるうら寂しい思い出話は後に「ゾラの精神に『居酒屋』を想起させる契機ともなっただろう」と指摘している<sup>64)</sup>。ロザネットは「ナナの姉」なのである。

ロザネットの身の上話に耳を傾けながら「女の話さなかったこと」、「どういう順序で彼女がそういう惨めな境遇から出られたのか、教育はどの愛人のおかげで受けられたのか」といぶかしがるフレデリックに、ロザネットは「ヴァトナさんの紹介」と答えている。こうしてヴァトナは、フレデリックとロザネットの関係を邪魔立てするどころか二人の間をとりもち、始終ロザネットの世話をやく。しかしながら、ヴァトナとロザネット二人の人生の抱擁、その持ちつ持たれつの関係は、二月革命によって崩れ去るだろう。この歴史的な契機に、ロザネットの方は金銭面の心配と無教養のコンプレックスが吹き出し、一方のヴァトナは「思想」擁護とロザネットに指摘された女としてのコンプレックスを爆発させて、激しく衝突してしまうのだ。と同時に、フレデリックとロザネットの関係にもまた亀裂が生じる<sup>65)</sup>。ロザネットの借金の手形を受け取り

にヴァトナの住いに赴いたことを機に、フレデリックには「ロザネットのあらゆる欠点が目につく」ようになるだろう。そしてロザネットと「二人きりでいるのが憂鬱でたまらなくなった」青年は、ダンブルーズ夫人のもとに通うことを決意し<sup>66)</sup>、ダンブルーズ夫人はかくして現れた彼に対して「倦怠から誘惑に屈する」<sup>67)</sup>のである。

今一度、小説の冒頭にまで遡ってみれば、フレデリックがアルヌー夫人へと積極的に近づくきっかけとなった場面にも、やはりヴァトナ嬢が「顔」を出していたことを確認できる。ペルランの家でヴァトナらしき肖像を目にした後、すぐにフレデリックはヴァトナをアルヌーの愛人だと想像する。そして、思いきって「奥さんは奥さんでよろしくやっているのでしょうか」とペルランに尋ねているのだ。「まさか。あの人は貞淑ですよ」との返事に自らの考えのあさましさを深く後悔した青年は、「ますます熱心に」アルヌーを訪問するようになったのだ<sup>68)</sup>。

マルティネは、Ⅱで紹介した恋愛のカドリーユCに関してアルヌー夫人、ロザネット、ダンブルーズ夫人、そしてルイーゼ・ロック<sup>69)</sup>は社会的階級や心理的タイプを具象化しているわけではなく、各々がフレデリックの意識のなかの恋愛への誘惑のイメージである<sup>70)</sup>、と述べている。我々は今、青年がそれらのイメージと出会う旅に、ヴァトナの「かさかさの手」がすべり込むように介入していることを理解できる。

さて、以上フレデリックの恋愛への関与に加え、ヴァトナ嬢がその他の若者、男性登場人物たちの感情のカドリーユに接点をもつことにも留意したい。

ある日、フレデリックの部屋に集った若者たちの話題は、政治から女へと移る。芸術家ペルランは「人間の雌は美的等級においては下位の生物であり」「美しい女の存在を認めず」、ユソネは彼の饒舌そのままに「栗色髪的女から金髪的女へと移る」のをよしとし、セネカルは「売春は圧制であり、結婚は不道徳であるから禁欲が好ましい」という。またシジーは「女にあらゆる種の恐怖感を抱いて」おり、デロリエにとっては「女は慰み者であって、それ以上でも以下でもない」<sup>71)</sup>。

ここに展開されている諸々の意見は、女性観あるいは恋愛観であるにとどまらず、青年たちの「人間性」そのものでもあろう。デロリエは、以上の弁にあるように、女を感情を向けるに値しない対象と見る。だからこそ、彼は自分の傍らで悲壮なまでに恋愛に人生を傾けようとする竹馬の友フレデリックのこと

が信じがたいのである。友のアルヌー夫人に対する恋慕を、彼は「青年期の感傷の名残りともなし、みじんの同情もできない」<sup>72)</sup>。まさしく、デロリエはフレデリックの対極にある「もう一人のフレデリック」というわけなのだ。

しかし、注目すべきは、女性をいかに理想化するのか（ペルランにとっての女は理想どころか抽象といえよう）、憧れるのか、それともいかに軽蔑、無視するのか、あるいはまた価値のない存在としてみなすのか（デロリエ、セネカルの例のように）など、以上に挙げた若者たちのあり様が一見いかにも多様であるかのごとく映りはするものの、それらはつまるところ「過剰」と「欠乏」との極端さを示しており、結局、同じところへと収束するということである。いいかえれば、そこには双方ともに「十分ではない」という真実がある。そして、ヴァトナ嬢の存在はここに絡む。彼女はすでに述べたように、女を男に近づけては、次には男から引き離す。一つに収束していく男たちの恋愛・感情生活において、「過剰」と「欠乏」の間にこの老嬢が現れ、両岸をつないでいる、というわけなのである。

## V. 老嬢の恋の舞とある青年

さて、我々は故意にある人物に触れないできた。それはデュサルディエの存在である。当初デルマールに入れあげていたヴァトナ嬢はデュサルディエに惹かれ、ついに熱烈な恋心を抱くようになる。なぜ相手がデュサルディエなのか、これには二つの理由が考えられる。

一つはヴァトナの「社会主義思想」だ。デュサルディエは私生児である。ヴァトナがそのことについてどの程度知っていたかは不明だが、自分がいなければ「いずれ施療院で死にしまう」境遇であったはずのロザネットに向けたのにも似た感情がおそらくあったのではないだろうか。と同時に、彼女がデュサルディエに近づいた最初の理由には、ロザネットを援助しながら利用しようとした浅薄な企みの点が共通している<sup>73)</sup>。

もう一つの理由は、バルザック描く老嬢と似通った「孤立する女」としての飢えであろう。ヴァトナは長い間「ペチコートに泥で汚して帰宅し、自分でつくった食事を一人で食べ、行火に足をのせて、薄汚れた灯火のもとで恋、家族、家庭、財産など、手に届かないあらゆるものを夢見て」<sup>74)</sup>きたゆえに、六月事変で若者を助け負傷したデュサルディエの看病<sup>75)</sup>を機に、その勇敢さ、誠実さ、そして男らしさに強く心を打たれ、彼を「望外な恋愛対象」としてとびか

かる。「彼女はまるで人喰い鬼の凄まじさで」、「文学も社会主義も」「慰めとしてきた学説や高尚なるユートピアも女性解放の理論もなにもかも、デルマールさえも捨てて」<sup>76)</sup>、デュサルディエに結婚を迫った。この場面は戯画的であると同時に、老嬢の絶望的な姿を印象づける。すでに読者には、フレデリックの眼差しを通して、ヴァトナの容姿からそのセクシュアリティに至るまでの情報が伝達されている。血のように紅い唇<sup>77)</sup>、男を見る時に顔全体に浮かび上がる欲望のさま、「才気と好色と肉感に満ちた、瞳のなかに金の点をもつとび色の美しい目」<sup>78)</sup>、「山猫のような眼差し」<sup>79)</sup>に「やせていながら、ふわりとした長い手」をもち「細いあごをして、豹のように身体をくねらせる不器量な女」<sup>80)</sup>は、一世一代の覚悟でデュサルディエにすがりついた。

ところが、デュサルディエの方はヴァトナに「少しも恋を感じる事ができないまま」、「過去の盗みの一件が忘れられず」、また彼女の「財」に引け目も感じて、結婚を断る。ヴァトナの恋は、突然着火し、メラメラと燃え上がったものの何ものかを温める間もなく消えてしまった、まさに「かさかさの枯れ木」のようだ。これが、読者がヴァトナ嬢を目にする最後の場面となる。

ちなみにこのヴァトナとの関係は、デュサルディエが感じはじめた生きることへのやり切れなさを加速させる。失恋に涙を流すヴァトナの口から彼女を貶めたロザネットへの陰険な憎悪、金に対する執着を耳にすることと時を一にして、青年は革命への落胆、この世に対する絶望感を拭い切れなくなっていく。

デュサルディエという登場人物の特異性について、ド・ピアジは「素朴でありながら、命、自由、正義、友愛の諸価値において非のうちどころのない信仰」、「ドグマに侵されない共和主義的理想」を体現する「デュサルディエは、異論の余地なく唯一の英雄的人物の一人であり、小説に歴史的意味を与える軸のひとつである。フレデリックは彼に対して本能的に、マリー・アルヌーに匹敵するほどの愛着さえ捧げている。[中略]もし主人公がこれほど優柔不断でなく不活発でもない性格に設定されていれば、デュサルディエは彼にしっかりと政治意識を持たせるべく導いていっただろう。デュサルディエは作品中にたびたび姿を現すが、鍵となる三つの歴史的場面に必ず登場し、叙述そのものと歴史的対象の間の架け橋の役目を担っている」と分析している。ド・ピアジはまた、フロバールがこの青年のなかに「人間が改善される可能性を秘めていること、進歩することを深く信じ」、「自分より豊かな友人を妬むことなく、むしろ友人の成功を喜びながら平等を賞揚する」<sup>81)</sup>人間像をつくりだしている、と

も指摘している。

若者の女性観、恋愛観は各人の「人間性」も暗示している、とⅣで述べたが、この点でも、フロベールはデュサルディエに限って、単なる女の好みや精神論を口にさせることをしない。この私生児はただ「同じ一人の女をずっと愛していたい」というだけだ。「そのいい方がいい方だけに、皆ちょっとしんとした。ある者はその純真さに驚き、またある者はおそらく内心に秘めた欲望に触れられたような気になった」<sup>82)</sup>。そんなデュサルディエの前に、作家は「もともと情にもろいたちの女」だったはずが「生活の荒廃にもまれた末にとげとげしい気性になってしまった」<sup>83)</sup>ヴァトナという女を対峙させたのだ。しかも、彼が理想的な政治・社会への希望を失いつつある時に。青年の人生に、夢はわずかなりと残されているだろうか。答えは問わずとも明らかであろう。

『感情教育』のなかで多くの登場人物がその姿を変質させていく（ヴァトナもそれを免れない）のに対して、デュサルディエ一人が最後まで「善き野蛮人」の徳を失わないことをあらためて確認しておこう。それはつまり、彼のような人間は粉碎される運命にあるということだ。フレデリックを前にして、デュサルディエは次のように語る－「すっかり絶望しちゃってね。[中略] やつらは共和国を殺しにかかっている。昔ローマでそれを殺してしまったように。[中略] 労働者だってブルジョアよりよいとはいえない。[中略] 皆、僕らに敵意をもっている。僕なんか何ひとつ悪いことをした覚えはないのだけれど。それでも何か胸を抑えられているみたいで重苦しいんだ。[中略] 自殺でもしたい気持ちだ。お金なんていりはいらない」<sup>84)</sup>。そういい終わると、デュサルディエは唯一の友人と感じているフレデリックのために、ヴァトナが脅迫まがいにロザネットに要求した借金 4000 フランを提供する（それは彼の貯金のありったけであった）。この後、フレデリックがデュサルディエを目にするのは、ナポレオン三世の竜奇兵となったセネカルが剣の前に自ら進み出て、まさに倒れんとする彼の最期の姿<sup>85)</sup>である。そしてこの場面により、フレデリックらの青春物語は一気に終演する。

## Ⅵ. さいごに

冬のある日、すでに 50 歳にさしかかったフレデリックとデロリエは、「あの頃」に出会った人々の消息を語り合っている。マルチノンとユソネの出世、相変わらず怪しい芸術家ぶりのベルラン、まったく消息不明のセネカル…。ロザ

ネットはウードリ爺さんの後家に入り、往事の魅惑的な姿は見ると影もない。フレデリックは「ロザネットのことからついヴァトナのことを連想した」<sup>86)</sup>。情報通のデロリエも、その後この女には一度も会うことがない、という。ヴァトナ嬢はどこへ行ったのだろうか。

フレデリックとデロリエの失敗の人生。トルコ女の家に忍び込む若き日の思い出をしみじみと語り合う二人にもはや「歴史」は存在せず、時は止まってしまったかのようなのである。『感情教育』に「私の世代の精神史」<sup>87)</sup>を意図したフロベールは、若者の夢あふれ、しかし挫折した青春を「幻の永遠性」<sup>88)</sup>として、一枚のレリーフに仕立てあげたといえる。そのレリーフの奥には二つうごめくものが見える。それは「消息不明」のセネカルが「峻厳な表情」そのままに相変わらず変わり身をくり返している姿であり、他方、同様に状況のつかめぬ一人の老嬢の影ではなかろうか。これらはフロベールにとって、「幻の永遠性」とはまた別の意味で普遍的なものなのであろう。セネカルは、ちょうど『ボヴァリー夫人』のオメーがそうであったように、人間の愚劣の図式に列なるといえる。一方、ジブシーあるいは黒豹にたとえられるヴァトナは、といえ、オメーがやはりそうであったように<sup>89)</sup>、『感情教育』の節目節目にかかわって姿を現わす、まさに作品のかくし玉であるのにちがいない。

## 註

使用したテキスト

FLAUBERT Gustave, *L'Education Sentimentale*, Œuvre de Flaubert II, Gallimard, 1952.

以下 E.S. と略記。

FLAUBERT Gustave, *Correspondance I*, Gallimard, 1973.

FLAUBERT Gustave, *Correspondance III*, Gallimard, 1991.

FLAUBERT Gustave, *Correspondance IV*, Gallimard, 1998.

- 1) *Correspondance III*, à Edmond et Jules de Goncourt, le 6 mai 1863, p.323.
- 2) Les deux Cloportes : ブヴァールとペキュシエを指す。Cf. *Correspondance III*, à Jules Duplan, le 15 avril 1863, p.319.
- 3) *Correspondance IV*, à Alfred Darcel, le 14 décembre 1869, pp.139-140 : 「(ヴァトナ嬢について) できうるだけのところで役立てたのはごく親しい友人で、その



- 人のために私は走り回り [中略] 弁護したりしたのですが、手厳しい手紙を二通も送ってよこし、一、芸術の問題をまるで幾何の問題でも扱うように考えて、二、『女性の声』紙のなかで激しく私を非難しているのです。しかしく聖なる位置>が何よりも大事です]
- 4) BOSQUET Amélie (1820-1904) ルーアン生れ。しばらく教員を勤めながら、地元の雑誌に寄稿、1845年に『幻妙不思議な国ノルマンディー』を出版。Emile Bosquetのペンネームで地方紙に小説『ルイーゼ・ムニエ』『田舎の恋』『しつけのよい女』などを発表。フロベールは彼女の原稿の売れ口を探すため尽力した。
- 5) 『女性の声』紙は、女性解放論者ウジェニー・ニボワイエが1849年から主宰した同名クラブの機関誌。Cf. DUBY Georges, PERROT Michelle, *Histoire des femmes en Occident IV*, Plon, 1991, p.252.
- 6) *Correspondance IV*, à Hortense Cornu, le 20 mars 1870, p.175.
- 7) 註3)に同じ
- 8) *Correspondance III*, à Jules Duplan, le 15 avril 1863, p.319.
- 9) MARTINEZ Michel, *Les romans de Flaubert*, Seuil, 1998, pp.45-49.
- 10) *E. S.*, p.69.                    11) *E. S.*, p.67.
- 12) RAIMOND Michel, «Le corps féminin dans l'Education sentimentale», dans *FLAUBERT – La Femme, La Ville*, PUF, 1983, p.23.
- 13) NAAMAN Antoine, *Les débuts de Gustave Flaubert et sa technique de la description*, Naaman Dilif, 1982, p.64.
- 14) Va-t'en 「立ち去れ」に女性名詞を表す[a]を付せば発音は「ヴァト (ゥ) ナ」である。ヴァトナ嬢がしばしば La Vatnaz と定冠詞とともに記載されることにも留意したい。
- 15) 寺田透『人間喜劇の老嬢たちーバルザック一面』岩波新書, 1984, pp.162-163.
- 16) Cf. GAULUPEAU Yves, *La France à l'école*, Découvertes Gallimard – Histoire, 1992, pp.63-77. /LELIEVRE Claude, *Histoire de la scolarisation des filles*, Nathan, 1991.
- 17) Cf. 阪上孝『フランス社会主義ー管理か自立か』新評論, 1981/ジャン・カサー『1848年ー二月革命の精神史』野沢協 監訳, 法政大学出版局, 1997.
- 18) Cf. ブノワット・グルー『フェミニズムの歴史』山口昌子 訳, 白水社, 2000.
- 19) *E. S.*, p.287.                    20) *E. S.*, p.329.                    21) *E. S.*, p.164.
- 22) *E. S.*, p.57.                    23) *E. S.*, pp.329-330.                    24) 註3)に同じ

- 25) ミショーはこれを「大作家に潜むく特権的男性>の素顔」と述べている。いかなる者も自らが位置する時代性を完全には免れない (MICHAUD Stéphane, «Représentations artistiques et littéraires», dans *Histoire des femmes en Occident IV*, cit., p.159.). ただしフロベールはこれらの「新しい女性」に理解を示してもしる: 「<母性礼讃>は将来の世代がおかしくて吹き出してしまうような馬鹿げた事柄のひとつになるだろう」(*Correspondance III*, à Ernest Feydeau, le 11 janvier 1859, p.5.)
- 26) *E. S.*, p.152.                    27) *E. S.*, p.163.
- 28) DE BIASI Pierre-Marc, *Flaubert – Les secrets de l'«homme-plume»*, Hachette, 1995, p.70.
- 29) *E. S.*, p.56.                    30) *E. S.*, p.83.                    31) *E. S.*, p.83.
- 32) *E. S.*, p.83.                    33) *E. S.*, p.84.                    34) *E. S.*, p.84.
- 35) *E. S.*, p.64.
- 36) ただしフロベールは、饒舌のユソネに、二月革命の争乱を前にして一度だけ意味深い言葉「英雄とは臭いものだね Les héros ne sentent pas bon」(*E. S.*, p.320)を口にさせている。
- 37) *E. S.*, p.106.                    38) *E. S.*, p.334.                    39) *E. S.*, p.337.
- 40) *Correspondance III*, à Edma Roger des Genettes, juillet ? 1862, pp.235-236.
- 41) *E. S.*, p.48.
- 42) フロベールがバルザックの人物描写の基準を偽りで幻とみなしていたことはいうまでもない。Cf. 拙稿 *Réflexion autour du personnage et de la phénoménologie narrative chez Flaubert I*, 島根大学法文学部紀要言語文化学科編第10号, 2002.
- 43) スタンダール『リュシアン・ルーヴェン II』島田尚一、鳴岩宗三 訳、人文書院, 1969, p. 264.
- 44) 「新しい時代」には、学生時代から「誰かの気を悪くしないことを気にかけて口をつぐみ」「教授たちに気に入るやり方を心得ていた」マルチノン青年が、七月王制下の実力者ダンブルーズ氏にとって替わる。彼は「片時も氏の身辺を離れず、秘書役をつとめ、父につくす息子のように世話をやいた」(*E. S.*, p.331)。
- 45) *E. S.*, p.229.                    46) *E. S.*, p.287.
- 47) ここでの「青踏派 bas-bleu」は18世紀文芸サロンの女性たちを示すのではなく英語の blue-stocking の直訳で、この表現はバルベイ＝ドルヴィリーが流行らせた。

- 48) 註3) に同じ
- 49) *Correspondance III*, à Ernest Feydeau, le 11 janvier 1859, p.5.
- 50) 「革命派の人々に認められるあらゆるキリスト教的なものは、私に嫌悪を催させます」 *Correspondance III*, à George Sand, le 5 juillet 1868, p.770.
- 51) 「フロベールの天才が熟すにつれ、[中略] そこに描かれるのと対照的なものが次第に空疎に、また色濃く顕現化される」 GIRARD René, *Mensonge romantique et vérité romanesque*, Grasset, 1980, p.157.
- 52) *E. S.*, p.342: ロザネットがヴァトナに投げつけた言葉。これがヴァトナとロザネットの縁の切れ目となる。
- 53) *E. S.*, p.427.      54) *E. S.*, p.57.      55) *E. S.*, p.151.
- 56) *E. S.*, p.427.      57) *E. S.*, p.105.
- 58) *E. S.*, p.163: ある日、フレデリックがロザネットを訪ねた時、黒い着物の老女が入ってくる。「ロザネットは女にとびかかるように、次の部屋に駆け込んだ。戻った時には泣いていた。」しばし後、ロザネットは立ち寄ったヴァトナを見て、救われたかのように嬉しそうな声をあげる。
- 59) *E. S.*, p.287: ロザネットはその後、裕福なロシア人公爵の庇護を受ける。
- 60) *E. S.*, p.286.
- 61) *E. S.*, p.288: ヴァトナについてロザネットは「あの人、あたしがついているから幸せなの」と口にしてる。
- 62) *E. S.*, p.317.      63) 註58) に同じ
- 64) DOUCHIN Jacques-Louis, «Rosanette et la ville corruptrice» dans *FLAUBERT- La Femme, La Ville*, cit., p.140.
- 65) *E. S.*, p.342.      66) *E. S.*, p.432.      67) *E. S.*, p.417.      68) *E. S.*, p.69.
- 69) ルイーゼ・ロックはフレデリックにとって他の3名の恋愛対象のうちもっとも疎遠で心をひかれぬ相手だが、娘の自分への「ひたむきな愛情」に触れ、「生まれてはじめて人に愛されていることを感じた。この新しい喜びは快いという程度にすぎなかったが、心のなかが伸びやかに広がる気がした。」(*E. S.*, p.284)。ルイーゼの純真な恋心は、フレデリック自身の「存在する権利を証明してくれるもの」となる。全てに希望を見出せなくなった彼がルイーゼを求め帰郷するのはそのためだ。
- 70) MARTINEZ, *op.*, cit., p.49.
- 71) *E. S.*, p.84.      72) *E. S.*, p.84.

- 73) *E. S.*, p.427. : デュサルディエと同じ店で働いていた時のエピソード。
- 74) *E. S.*, p.329.      75) *E. S.*, p.427.      76) *E. S.*, p.427.
- 77) 「口はセクシュアリティを含意する。たとえばシャルルのく青ざめ、震え、突き出した分厚い唇>はエマがそのように見つめているのだが、彼の愚鈍さとエマの嫌悪感とを表現している」 BREUT Michèle, *Le Haut & le Bas – Essai sur le grotesque dans Madame Bovary de Gustave Flaubert*, Editions Rodopi, 1994, pp.216-217.
- 78) *E. S.*, p.105.      79) *E. S.*, p.195.      80) *E. S.*, p.287.
- 81) DE BIASI, *op.*, cit., p.77.
- 82) *E. S.*, p.83.      83) *E. S.*, p.427.      84) *E. S.*, p.428.
- 85) *E. S.*, p.448.      86) *E. S.*, pp.453-454.
- 87) *Correspondance III*, à Mademoiselle Leroyer de Chantepie, le 6 octobre 1864, p.409.
- 88) *Correspondance I*, à Louise Colet, le 15 janvier 1847?, p.429.
- 89) Cf.拙稿『「ものぐさな村」のオメーに関する考察』、島根大学法文学部文学科紀要第24号, 1995.